

民族音楽サークル「インタムシカ」活動報告（1989-2009）

――（下）早すぎた地域貢献の一事例――

Report on the Extracurricular Activities of ‘*Intamusica*’, the Ethnic Music Club of Tokai University (Sapporo Campus), from 1989 to 2009
– Part 2: A Case of Premature Community Service –

沖野 慎二¹

Shinji Okino²

要 旨

本稿は、東海大学札幌校舎所属の民族音楽サークル「インタムシカ」の20年に及ぶ活動のうち、後半10年間の軌跡をたどりながら、大学教育の枠内において、学生が地域との交流を主体とした課外活動を開始してから運営上の問題点や、音楽を継承していく際の課題等について報告するとともに、なぜサークル活動がその後衰退していったのか、その要因についても明らかにするものである。

Abstract

The author reports the extracurricular activity of the “*Intamusica*”, the student’s ethnic music club of Tokai University (Sapporo Campus), in the last 10 years. He focuses on the various management problems, instruction methods of playing instruments, succession of music, and so on, under the university educational system, since that club started the community services. In this report, he also states the factors in that activity falling down afterwards, from the case of “*Intamusica*”.

キーワード：民族音楽，楽器，課外活動，地域貢献

Keywords: Ethnic Music, Musical Instruments, Extracurricular Activity, Community Service

1. はじめに

本稿（下）は、東海大学（札幌校舎）の民族音楽サークル「インタムシカ」（以下、単にインタムシカと表記する）の20年に及ぶ活動のうち、前半期（1989年度～1999年度）の報告（上）（沖野，2010）に引き続き、後半期10年間（2000年～2009年度）の軌跡をたどりながら、大学教育の枠内において学生が課外活動を行う際に直面した運営上の問題点や指導上の注意点、サークル活動が活性化するときの条件や、逆に停滞期・衰退期・低迷期をむかえる際の要因、地域との交流の実践成果、音楽活動を継承していく際の課題等について主に部長教員の立場から見た活動内容とそれに対する評価を報告するものである。

本稿（下）は前回の報告（上）と同じく、2006年度国立民族学博物館共同研究『ヘリテージ（遺産）の所

¹ 東海大学国際文化学部地域創造学科，005-8601 札幌市南区南沢5条1丁目1-1

² Department of Community Development, School of International Cultural Relations, Tokai University, 5-1-1-1 Minamisawa, Minami-ku, Sapporo 005-8601, Japan

有と利用に関する観光文明学的研究』(研究代表者:西山徳明) 第4回共同研究会(2006年11月25日～26日)において筆者が研究報告した「民族音楽・楽器の学習・継承の試み～北海道における学生と地域の交流活動から」の講演内容および筆者が本学で例年春学期に担当している「地域創造学―民族音楽・楽器は地域にどう貢献できるか―」の講義内容を加筆訂正し、報告するものである。

なお、本文中の年月日や演奏曲目等のデータについては記録が残っている(または筆者の記憶に残っている)ものに限定して記載したことをあらかじめお断りしたい。

2. 「インタムシカ」活動概要(その2:2000年度～2009年度)

以下、2000年度以降の活動を時系列に沿って記述する。

(1)2000年度

- ・4月:新入生2名(国際文化学部生1名,工学部生1名)が入部,部員数は9名となった。

新たに入部した2名のうち1名はドラムスやパーカッション,サクソ,キーボード等を,1名はギターを弾く経験者で,また,2名とも協調性があり,自己主張をあまりしない控えめな性格であったことから,前年に立ち上げたバンドに柔軟に溶け込み,以後,インタムシカの音楽活動の中核として活躍することになっていった。

- ・5月8日:北海道新聞(朝刊)の教育面「カレッジライフ」コーナーでインタムシカが紹介され,まもなく,記事を見た厚別北小学校のPTAより演奏依頼が来た。それ以降,2002年夏頃まで次々とさまざまな場所での演奏依頼が来るようになった。
- ・6月:建学祭サークル展示会場(N208教室)にて楽器展示(図1および図2)と演奏を披露した。4年生部員の発案で,新曲として沖縄音楽数曲とジャマイカのレゲエやスカが加わった。特に,メロディアンズ(The Melodians)のヒット曲として著名なレゲエの古典「バビロン川のほとりで Rivers of Babylon」はその後代々後輩たちに伝授されていった。一方,スカの名曲として著名なジャスティン・ハインズ&ザ・ドミノズ(Justin Hines & the Dominoes)の「キャリー・ゴー・ブリング・カム Carry Go Bring Come」については,同年の「追分ラッキーフェスティバル」においても披露したものの,そのリズム感が上手くつかめないまましだいに行き詰まり,結局翌年以降演奏されることはなかった。



図1 楽器展示(1)



図2 楽器展示(2)

- ・7月1日:厚別北小学校(札幌市厚別区)第二音楽室にて,PTA主催のクラス(三年二組)レ

ク リエーションに出演・演奏³, このときの曲目は「バビロン川のほとりで」(前述), 「Sheebeg and Sheemore (シーベグ・アンド・シーモア)⁴」, 「Meva」, 「Dolos」(以上, 南アフリカ), 「ていんさぐの花」(沖縄), 「島唄⁵」, 「八十八夜⁶」, 「不知火⁷」の全 8 曲になった。インタムシカの演奏終了後は, 子供たちのリコーダーと鍵盤ハーモニカをまじえて「きらきら星」(フランス民謡)と「ちょうちょ」(スペイン民謡)の 2 曲を全体演奏した。



図 3 演奏風景 (厚別北小学校)



図 4 演奏終了後 (真駒内曙小学校)

- ・ 7月 15～16 日：前年度に引き続き, 「追分ラッキーフェスティバル」に出演・演奏, 再び好評を博す。
- ・ 10月 7 日：抱土舎例会 (三上アトリエ, 千歳市) に出演した。
この頃から 4 年生部員の 1 名 (ベース担当者) がフィドル (バイオリン) でアイリッシュ音楽等を演奏するようになる。
- ・ 12月 8 日：北海道東海大学親交会パーティー (ルネッサンスホテル, 札幌市) に招かれ演奏した。当日の演奏曲目は「Rivers of Babylon」(前述), クウェラ・メドレー「Meva~Dolos~Sono Sam」(南アフリカ), 「Miss Rowan Davis⁸」(スコットランド), 「花～すべての人の心に花を～」(沖縄), 「風の船¹⁰」(日本), 「枯葉¹¹」(フランス) の全 6 曲になった。
- ・ 12月 21 日：真駒内曙小学校 (札幌市南区) クラスレクリエーションに出演・演奏した。当日の演奏曲目は「Rivers of Babylon」, クウェラ・メドレー「Meva~Dolos~Sono Sam」, 「Sheebeg and Sheemore」, 「Miss Rowan Davis」, 「花～すべての人の心に花を～」, 「安里屋ユンタ」(沖縄), 「枯

³ このときの演奏風景は『東海大学新聞』第 779 号 (2000 年 7 月 20 日) に掲載された。

⁴ 18 世紀に活躍したアイルランドの作曲家で盲目のハープ奏者として著名なターロウ・キャロラン Turlough O'Carolan (1670-1738) の代表曲。特に北海道では Hard to Find による演奏が広く知られており, その愛好者も多い。

⁵ 日本のロック・グループ, ザ・ブーム The Boom の作曲・演奏で有名な沖縄民謡風の曲。1993 年発売後大ヒットし, 今日まで多くの歌手に歌い継がれている。

⁶ 日本のフォーク・グループ, NSP の曲 (1978 年)。

⁷ 当時の部員の一人, 由良一彦氏作曲のフォークソング。

⁸ 現代スコットランド伝統音楽の作曲家, ピアノ・アコーディオン奏者, プロデューサーの Phil Cunningham の代表曲。北海道では 1990 年頃より Hard to Find による演奏がよく知られており, その主旋律の美しさから, ペニー・ウィスルで演奏する愛好家も多い。

⁹ 喜納昌吉とチャンプルーズ (沖縄) の代表曲 (1980 年) で, 日本をはじめ世界中の多くの人々に歌い継がれている名曲である。

¹⁰ 日本のフォークグループ, ふきのとうの曲 (1976 年)。

¹¹ イブ・モンタンの歌唱で有名になったシャンソンの名曲。ジャズによる編曲も多い。

葉」の全7曲。「枯葉」の際、間奏のカズーの音色が小学生たちに衝撃を与え、全員から拍手喝采を浴び、演奏終了後も生徒たちの見学が絶えなかった(図4)。

- ・翌年3月:3名が卒業、うち1名は研究生として大学に残り、演奏活動を継続、部員数は7名となった。

この年、本学をプライベートで訪れた Sven Berger¹²氏によるレクチャー・コンサート(会場:M1021教室)を鑑賞した部員1名が氏の吹くシャリユモ(クラリネットの原型の楽器)に興味を持ち、その後、類似する楽器2種類(ポケット・クラリネットと竹製でバンブー・サクソと呼ばれるもの)を購入、さらにクラリネットも購入し、猛練習の末、建学祭で演奏するまでに至った。

(2)2001年度

- ・4月:新入生1名(工学部、バイオリン担当)が入部、部員数は8名となった。その後さらに1年生1名(工学部、ペニー・ウィスル担当)が入り9名となった。

バイオリン担当の1年生は全くの初心者であったが、ちょうどバイオリンを弾く4年生が卒業した直後で指導する立場の上級生がいなかったため、部長教員が楽器の支え方や左手のポジション、運指法、弓の持ち方と弾き方(ボウイング)の概要を伝授しつつ、比較的易しい主旋律を持つ「Rivers of Babylon」を練習曲として選んだ結果、その二ヶ月後の建学祭屋外ステージに立つことができた。一方、ペニー・ウィスル担当の1年生も初心者であったが、同楽器を吹く複数の先輩から指導を受けながら比較的短期間で修得することができた。

- ・4月27日:NHK札幌(総合テレビ)『金曜ひろば640』に部員3名と部長教員が出演した。
- ・5月6日:イヌイト(カナダ・ヌナブト準州の先住民)との交流会(会場:札幌市デジタル創造プラザ・インタークロス・クリエイティブ・センター)に出演・演奏し、少なからず国際交流に貢献することができた。なお、当日の演奏曲目は、チンドン風に編曲した「聖者の行進」(アメリカ合衆国)と「赤色エレジー」(日本のフォークシンガー、あがた森魚のヒット曲)、「安里屋ユンタ」、「花~すべての人の心に花を~」、「Sukiyaki(上を向いて歩こう)」(坂本九の大ヒット曲、1963年)、「明日があるさ」(同)の全7曲になった。
- ・6月17日:建学祭サークル展示会場(N208教室)にて演奏を披露、部員1名がアイヌの五弦琴トコリによる演奏(サハリン・アイヌの伝承曲「トー・キト・ランラン」)を初披露した。また、建学祭屋外ステージに初出演し、南米のダンス音楽「ランバダ Lambada¹³」を初披露した。また、建学祭直後に4年生1名(国際文化学部生、ウクレレ担当)が入部し、部員数は10名となった。
- ・7月8日:「菊水銀座商店街まつり」(札幌市白石区)に出演し、市内で活動するチンドングループとともに街の活性化に貢献した。
- ・7月14~15日:「追分ラッキーフェスティバル」に出演した。
- ・8月5日:「もいわ夏祭り」(会場:札幌市南区藻南公園)に出演し、ステージ上で演奏を行うと

¹²ヨーテボリ大学(スウェーデン)音楽学部教授で、特に中世・ルネサンス音楽の研究者・演奏者・指揮者として世界的に知られている。

¹³1988~89年にかけて世界中で大ヒットしたダンス曲。セネガル、ブラジル、フランスなど様々な国々の出身者からなる7人組のグループ、カオマ Kaoma による演奏のものが有名だが、原曲はボリビアのフォルクローレ・グループ、カルカス(Los Kjarkas)の「泣きながら Llorand Se Fue」である。なお、日本ではランバダとして大ヒットする以前からフォルクローレ・グループ、カンターティ Kantati が録音しており、また、北海道では福井岳郎氏(フォルクローレ音楽家、歌手、チャランゴ奏者)が同曲をたびたび採り上げて演奏活動をしていた。

ともに、『手作り楽器で遊ぼう』のコーナーにおいて、地元の子供たちに2種類の楽器製作の指導を行い(図5)、完成した楽器で合同演奏(図6)、地域活性化に協力・貢献した。



図5 楽器製作指導



図6 合同演奏

『手作り楽器で遊ぼう』では、あらかじめインタムシカ側で製作する楽器の選択について十分議論し、楽器製作に必要な材料と道具(図7)を事前に用意した。製作の簡便さと安全性を考慮した結果、材料は工作用紙、タコ糸、輪ゴム、ビニール袋とし、道具ははさみ、カッター、スティックのり、穴開けパンチとして、その大部分を100円ショップから購入した。当日は部員と部長教員全員で指導に当たり(図5)、子供たちが加工できない部分については部員および部長教員が手伝った。その結果、2種類の楽器が完成した。「うなり板」(図8, 左)と「カズー」(図8, 右)である。

では、なぜ「うなり板」と「カズー」を楽器製作の題材として採りあげたのか、製作の簡便さ以外の理由をここで説明しておきたい。



図7 材料と道具



図8 完成した楽器2種類

一つ目のうなり板は、細長い薄い板(素材は木や骨などさまざま)に紐をつけて振り回すことで板が回転し、その周りの空気が振動して音が発生する「気鳴楽器」の一種で、石器時代の遺跡からも発見されている人類最古の楽器の一つであり、また、世界中のさまざまな民族の生活(儀礼など)の中で使用されてきた人類にとって最も重要な楽器の一つである(図9はオーストラリア先住民が製作した観光土産品のうなり板)。このうなり板は日本でも沖縄に存在することはすでに知られていたが(関根, 1989, p.79)、北海道のアイヌもレラ・スイエ・プ(アイヌ語で「風を・起す・もの」の意)と呼ばれるうなり板をかつて使用していたことが沖野、関根の研究によって近年明らかにな

った(沖野, 1994; 沖野, 2000; 関根, 2003, p.40)。

二つ目のカズーについては前回本稿(上)でも採りあげたが、同様の原理で楽器本体に装着された膜が振動して音が鳴る「鹿笛」をアイヌや東北の狩猟民マタギが使用していた。



図9 うなり板



図10 演奏風景(南沢小学校)

以上のように、いずれの楽器とも歴史が古く世界中でよく知られ、さらに北海道に居住する先住民アイヌが同様の楽器を使用していたことから、これらの2種類の楽器を子供たちに伝えることは大変有意義であると考えられたからである。

楽器完成後、ユーモラスな音色のカズーと全身を使って振り回して音を出すうなり板の響きはその音を出す行為とともに子供たちには面白く興味深く聴こえたようで、合同演奏も含め大変好評であった。

- ・ 9月21日:『音楽と星の夕べ』(南沢小学校体育館, 札幌市南区)に出演し、クラシック・ギターによる「禁じられた遊び」、ウクレレとリコーダーによるルネサンス音楽「ブランル」、アイリッシュ音楽「シーバグ・シーモア」ほか(図10)、フォーク・ギター弾き語りによる日本のフォーク「流星ワルツ」、ウクレレ弾き語りによるスタンダードナンバー「星に願いを」などを披露し、地域のかたがたと交流した。
- ・ 10月26日:東海大第四高校の世界史授業(部長教員と部員4名による出前授業)において、「弦楽器でたどる世界史」と題して、クラシック・ギターによる「禁じられた遊び」、フォーク・ギター弾き語りによる日本のフォーク「22才の別れ」、ウクレレとリコーダーによるルネサンス音楽「ブランル」、トンコリによるサハリン・アイヌの伝承曲「トー・キト・ランラン」を演奏した。

この頃から従来使用していたM1021教室が演習等で使用されることが多くなったため、活動場所をN212教室(北方圏資料室, 当時)に移すことになった。

- ・ 11月:ノーザンクロス(千歳市)出演した。
- ・ 12月14日:北海道YMCA『クリスマス礼拝&茶話会』に出演、クリスマス関連の曲のほか、篠笛と三味線による邦楽、ギターの弾き語りによる日本の70年代フォーク、リコーダーとウクレレによるルネサンス音楽、フィドル、ペニー・ウィスル、コンサーティナのトリオによるアイリッシュ音楽などを披露した。
- ・ 12月:西山恒夫教授(工学部海洋環境学科, 当時)主催のクリスマスパーティー(会場:札幌校舎2階WING)に出演した。
- ・ 翌年3月:1名卒業(2002年度, 科目等履修生として再び在籍)、また、研究生の部員1名が海

外留学のため退学し、部員数9名となった。

(3) 2002 年度

- ・ 4月：新入生1名（工学部，アコーディオン他担当）が入部し、部員数は10名となった。
- ・ 4月27日：介護老人福祉施設アートヒルズ（札幌市南区）にてレゲエ，フォルクローレ，トンコリによるアイヌ音楽，ルネサンス音楽，アイリッシュ音楽，篠笛とクラシック・ギターによる「故郷」（日本），クウェラ，日本のフォーク，クラシック・ギター・ソロなどを演奏した。
- ・ 6月15～16日：建学祭サークル展示会場および屋外ステージ，ESSサークル主催のカフェ（会場：2階 WING）で演奏。WINGでは Modern Jazz Club（当時）のメンバー4名（サキソフォン，トランペット，エレクトリック・ベース，ドラムス）とセッションを行い，ジャズ風にアレンジしたクウェラとシャンソン「枯葉」を演奏した。
- ・ 7月：追分ラッキーフェスティバル出演。Modern Jazz Club のサキソフォン担当者が同行し，インタムシカのステージに賛助出演した。
- ・ 7月：「ひだまりの丘夏祭り」（ひだまりの丘，札幌市南区）に出演。日本の70年代フォークやトンコリの演奏などを披露した。
- ・ 翌年3月：3名卒業，2名退学し，部員数は5名となった。

この2002年度は，ちょうど1999年に入学しサークルの中核となったメンバー3名が卒業年度で卒業研究や就職活動などで多忙になり，また，部長教員も会議等で多忙になったことが災いし，これ以降のインタムシカの演奏活動はしだいに停滞・低迷していった。また，特に中核メンバーのうち2名が「個性的」でありすぎたことが災いし，彼らの得意とする日本のフォークやシャンソン，カンツォーネなどいずれのレパートリーも後輩たちへ継承されることはなく，むしろ3年生部員2名（2000年度入学）が2年生および1年生の部員にレゲエやアイリッシュ音楽，沖縄音楽などの伝承の担い手となった。

(4) 2003 年度

- ・ 4月：新入生6名（工学部5名，国際文化学部1名）が入部し，部員数は11名となった。
この大量の入部により部員の大半は工学部生となったが，国際文化学部生に比べ，高学年になると実験・実習等で多忙となり，サークル活動に参加する機会が減少していったため，このようなサークルを構成する学生の所属学部の偏りもまた活動低迷の大きな原因の一つとなった。しかしながら，新入生部員はバイオリン経験者2名，キーボード経験者1名を含み，また，残りの3名も管楽器やパーカッション等を随時修得していくなど，大変意欲的で即戦力となったことから，彼らが卒業するまでインタムシカの演奏活動にとって大きな力となっていった。
- ・ 6月：建学祭北方圏文化学科展示（北方圏文化学科学生，生越玲子氏の個展「木賊焼展」）会場において演奏¹⁴した（図11）。また，例年と同様，建学祭ステージにも出演した。

¹⁴ この時の演奏の模様は『北海道東海大学連合後援会通信アクセス ACCESS』Vol. 17(2003), p.33に掲載された。



図 11 演奏風景 (2003 年度建学祭)



図 12 演奏風景 (2005 年度建学祭ステージ)

- ・ 7月：追分ラッキーフェスティバルに出演した。インタムシカ同窓生3名（篠笛，二胡，ギター）によるユニット「和・洋・中」や，前年度卒業生によるウクレレ弾き語りのシャンソン「オー・シャンゼリゼ」（フランス）なども披露された。
- ・ 翌年3月：2名卒業し，部員数は9名となった。

(5) 2004 年度

- ・ 4月：新入生1名（工学部，ペニー・ウィスル担当）が入部し，部員数は10名となった。
新入生は入学前より民族音楽に親しんでいたことから，ペニー・ウィスルを短期間で修得し，7月の追分ラッキーフェスティバルのステージで披露するなど即戦力となった。
また，3年生（国際文化学部，吹奏楽経験者）が入部し，部員数は11名となった。
- ・ 6月：建学祭サークル展示会場および屋外ステージで演奏した。
- ・ 7月：追分ラッキーフェスティバル出演した。
- ・ 翌年3月：2名卒業し，部員数は9名となった。

(6) 2005 年度

- ・ 6月：建学祭サークル展示会場および屋外ステージで演奏した（図12）。
- ・ 6月：北海道東海大学市民講座（道民カレッジ連携講座）に講師（部長教員）とともに出演した。
- ・ 7月：追分ラッキーフェスティバル出演した。
2005年度の入部は0名であった。
- ・ 翌年3月：1名卒業し，部員数は8名となった。

(7) 2006 年度

- ・ 4月：新入生1名（国際文化学部，ギターおよびペニー・ウィスル担当）が入部し，部員数は9名となった。
新入生は当初，楽器演奏に関してまったくの初心者であったため，部長教員がギターの基本的な構え方やコード（和音）の押さえ方，弦のつま弾き方（ストローク）等を伝授した。その際，インタムシカの代表的レパートリーの一つで，ギター初心者にも比較的押さえやすいA，D，Eの3コードからなるレゲエの曲「Rivers of Babylon」を練習曲として選択した。また，新入生が希望していたフォーク・ギター（アコースティック・ギター）は弦のゲージが太く，張り（テンション）が強

いため、特に初心者には押さえる際に大きなストレスがかかることを考慮し、練習開始当初は弦のゲージが細く、張りが弱いエレクトリック・ギターを貸与して練習を課した。一方、ペニー・ウィスルについては、先輩たちから奏法を習得し、比較的短期間でアイリッシュ音楽などを演奏できるまでに至った。

- ・ 6月：建学祭サークル展示会場および屋外ステージで演奏。サークル展示会場ではインタムシカの所蔵楽器の展示と解説を博物館実習生が行った。このときの実習風景は、沖野による報告に掲載されている（沖野，2008，p.58，写真10）。
- ・ 9月：1名卒業し、部員数は8名となった。
- ・ 10月～翌年1月：部長教員が病気休暇で4ヶ月不在となった。
- ・ 翌年3月：4名卒業し、部員数は4名となった。

(8)2007年度

前年度入学した2年生3名（いずれも国際文化学部）が入部し、部員数は7名となった（新入生は0名）。この3名のうち特に吹奏楽でドラムスやパーカッションの経験のある学生1名が打弦楽器ハンマー・ダルシマーの演奏を短期間で修得し、6月の建学祭ステージでアイリッシュ音楽などを披露した。

- ・ 6月：建学祭において屋内で楽器展示を行い、屋外ステージに出演した（図13）。
- ・ 7月：追分ラッキーフェスティバルに参加した（出演せず）。
- ・ 9月：2名卒業し、部員数は5名となった。
- ・ 翌年3月：1名卒業し、部員数は4名となった。

(9)2008年度

- ・ 6月：建学祭において楽器展示を行った。
この年、新入生の入部はなく、部員数は3年生4名となった。
- ・ 6月～翌年1月：部長教員が再び病気のため休職し、その間不在となった。



図13 演奏風景（2007年度建学祭ステージ）



図14 「ほろよい」演奏風景

(10)2009年度

- この年も新入生の入部はなく、4年生4名のみとなった。
- ・ 6月：建学祭において楽器展示を行った。

- ・翌年3月：3名卒業し、部員数は1名となった。
- ・翌年9月：最後の4年生部員が卒業し、部員数はついに0となった。

3. インタムシカの活動—その問題点と課題

1999年に部員・部長教員一丸となってバンドを立ち上げたインタムシカは翌年の2000年度から札幌市内を中心に各所からの出前演奏の依頼を受け、地域貢献活動を開始した。演奏する機会も増え、その活動は順風満帆に見えたが、しかし、2001年度をピークに次第に活動は低迷、2009年にはほぼ終息するに至った。では、なぜ活動が衰退していったのか、そこにはどのような背景・要因があったのかについて考察したい。

1) 演奏機会の増加に伴う問題点

2000年度から本格的に開始した出前演奏であったが、演奏の機会が増え、地域活性化の一助になった反面、その機会が増えるほど部員および部長教員にとって時間的に制約され、ゆとりがなくなった結果練習量が減り（あるいは、本番＝練習という事態にも陥りかねず）、同時に新曲を開拓するゆとりもなくなった結果、演目の固定化につながり活動がマンネリ化していったことが活動の衰退した要因の一つにあげられる。また、その背景には、高学年になるにつれて実験・実習や卒業研究などの学業やアルバイト、就職活動の早期化・長期化等で多忙になった部員（特に理工系の学生）や会議の増加などで忙殺されていった部長教員の存在もうかがえる。

2) 活動の継承に伴う問題点

上記1)で指摘したような「ゆとり」がなくなったことに伴い、新しい担い手（新入部員）を確保し育成する機会や「市場」（観る側の人々とその「場」）を開拓する機会、演奏技術を維持し（または向上させ）、それまで蓄積したレパートリーを後輩たちに伝えていくといった機会も同時に減少したことが活動衰退の要因の一つにあげられる。

3) 「オープン性」の問題—インタムシカは「開かれた」サークルであったか？

筆者がインタムシカの部長教員に就任して以来、学内外の学生や一般の人々から「インタムシカって何をしているサークルですか？」という質問をいただくことが多い。「インタムシカ」という言葉の意味も含め、活動自体が外部から見るとわかりにくいという印象を持たれる方が多いようである。部員同士が常に調和を心がけ、和気あいあいとした雰囲気を保ちながら活動してきたことはインタムシカの最大の長所であったが、同時にその姿勢はともすれば「内向き」になりがちで、外に向かって発信するという積極性にやや欠けていたことは否めないであろう。これは、部員および部長教員によるマネジメントのあり方とも関連すると思われるが、誰にでも判りやすい活動の公開・発表（プレゼンテーション）の方法を工夫することで、活動を継承していく大きな動因にも成りえたし、また、単なる和気あいあいの雰囲気を超えるような意味づけをそこに付加することもできたのではないだろうか。

4. インタムシカの活動—その歴史的意味と存在意義、魅力

インタムシカにとって不幸だったのは、地域貢献活動を本格的に開始した2000年という年は、大学生による地域活性化活動は全国的にもまだ一般的ではなく、ほとんど注目されていなかったこと、また、本学国際文化学部においては「地域創造学科」は存在せず、その学科設置計画すらなかったことである。皮肉にも「地域創造学科」が設置された2004年度からは、その学科名称とは裏腹に、入学する学生の「質」（「種類」または「志向性」と言い換えてもよい）はそれ以前の学生と

は異なり、インタムシカの活動に興味を持つ学生は激減し、それと同調するかのように活動自体も縮小の方向へ向かっていった。したがって、インタムシカの2001年をピークとする2000年～2002年頃の活動は「あまりにも時代を先取りした」「早すぎた」活動だったといえることができる。

前述のようにインタムシカの大きな魅力の一つはサークル内に和気あいあいとした雰囲気があることである。そのことが聴き手に「安っぽい」、「ルーズな」、「下手なのか上手いのかよくわからない」、しかし、「だから安心して聴ける」との印象を与えていたことは確かである。インタムシカの演奏を観た(日頃から辛口の発言をする)ある教授の「俺は、癒して言葉は嫌いだけど、インタムシカの演奏を聴くと何だか癒される気がする。」という発言¹⁵にその本質が端的に現れているように思われる。楽器演奏のスキルのない、まったくの初心者でも入門が比較的容易く、他の「英才教育」的な「芸術音楽」の課外活動と比べて「敷居」がきわめて低い、素養のある人ならさらに新しい楽器にアプローチできるチャンスが多い、などの点において、インタムシカのこれまでの諸活動は特筆すべきものであり、今日あらためて振り返ってみると、さまざまな運営上の問題点や課題があったとはいえ、彼らが果たしていた役割とその存在意義はきわめて大きかったものと言えよう。

5. あとがき—インタムシカ, その後

2010年度に入り新たな動きがあった。2010年4月、新入生数名(国際文化学部および生物理工学部所属)が新たに結成したアカペラ・サークルが、部員数1名(同年9月卒業)となったインタムシカを引き継ぎ、サークルの名称をA Cappellaと変更し活動を継続していくことになった。この時点で20年余りの長きにわたって使われ続けた「インタムシカ」というサークルの名称は消滅したが、それまで使用していた楽器や機材、楽譜等はA Cappellaがすべて引き継ぎ、活用していくことになった。また、学内外の公認・非公認、あるいは特定のサークルに属さない個人またはグループ等の申し込みがあった場合にそれらの楽器類や機材の貸し出しも行われることになり、まもなくその成果が現れる出来事が起こった。

同年9月22日(13:30～)、学生有志が結成した4人組バンドによる「ほろよいミニ・コンサート2010」(図14)がM1021教室にて開催された。かつてはインタムシカが、現在はA Cappellaが管理しているギター、ベース、アンプ、PA(パブリック・アドレス・システム)、マイク等が貸し出され、特に2001年に購入後、インタムシカが公式の場で一度も使用することがなかったPAとマイクがこの時初めて活用され、日の目を見ることとなった。なお、このコンサートでグループ「ほろよい」は「ハロー・グッバイ」、「イン・マイ・ライフ」、「フロム・ミー・トゥー・ユー」、「ヘルプ!」、「ウィズ・ア・リトル・ヘルプ・フロム・マイ・フレンズ」、「サムシング」、「オブラ・ディ・オブラ・ダ」、「レット・イット・ビー」(以上、ビートルズの代表曲8曲)と「ウイッシュ・ユー・ワー・ヒア(あなたがここにいてほしい)」(ピンク・フロイドの代表曲)を演奏し、その心地よい音響空間の中で拍手喝采のうち幕を閉じた。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、多くの方々から直接的・間接的なご教示・ご指導・ご協力(楽器等の寄贈含む)等々をいただいた。特に、西山恒夫、西村弘行、清原瑞彦、原俊彦、高田壮則、竹中踐、

¹⁵ 2001年3月、原俊彦教授(現・札幌市立大学)より

光澤舜明, 小林公司, 小田島香織, 川嵯一彦, 生越玲子, 平木隆之, 武田昌之, 佐保吉一, 大形利之, 森越一世, 町田佳世子, 伊藤明彦, 藁科昇, 山本グイスランソン由佳 (以上, 本学関係者), Sven Berger, (故) 平泉金弥, 高橋佳尚, 福井岳郎, 野村修一, 嵯峨治彦, ハレダイスケ, 堀口栄一, やすおかあけみ (以上, 音楽関係者), 三上禮子, 長根亜希, 松居スーザン (以上, 千歳抱土社関係者), 濱田幸治, 高橋義人, 山本晋 (以上, 医療関係者), また, 写真の掲載に快く同意して下さった定免達, 岡崎哲也, 岡崎達也, 島崎康平 (以上, 「ほろよい」) の諸氏を含む, これまでインタムシカを盛り立てて下さったすべての方々に心よりお礼を申し上げたい。

参考文献

- 沖野慎二(1994), 「アイヌ民族に“うなり板”は実在したか?」, 『北海道立北方民族博物館研究紀要』
3, 39-59
- 沖野慎二(2000), 「アイヌ民族の楽器」, 『アイヌ文化』 **24**, 3-28
- 沖野慎二(2008), 「博物館学芸員課程活動報告(2004-2006年度)」, 『北海道東海大学高等教育研究』
2, 55-63
- 沖野慎二(2010), 「民族音楽サークル「インタムシカ」活動報告(1989-2009) — (上) 初心者が楽器を演奏するとき —」, 『東海大学高等教育研究(北海道キャンパス)』 **3**, 29-39
- 関根秀樹(1989), 『民族楽器をつくる』, 創和出版
- 関根秀樹(2003), 『新版 民族楽器をつくる—音と楽器のミンゾク学』, 創和出版

(受付: 2011年1月31日, 受理: 2011年3月3日)